

「姑蘇繁華図」と蘇州の都市空間構造

巖 明

1 画卷の背景

乾隆初年の蘇州は、すでに都の北京に次ぎ、中国の第二の都市になっていた。当時の蘇州は、中国で最も大きい絹織物、綿布及び書籍の市場を有し、江南における食糧の消費と中継、及び金融、流通、出版の中心地であったほか、貴金属及び玉や漆器の加工も発達していた。そして、全国の流行をリードする服飾や履物の生産センターであり、全国、特に江南の商品の重要な集散地であった。「姑蘇繁華図」には、このような大都市の繁栄ぶりが生き生きと描かれている。乾隆年間に至り、蘇州城の東北部は絹物の生産区域となり、西北部は工業と商業の中心地で、西南部は行政中心となった。工業・商業の繁栄が続き、蘇州は江南の中心都市というだけでなく、全国で最も有名な経済都市となった。

明清時代における蘇州経済の特徴は、絹織物と綿布の貿易を中心に、各地の商人と輸送業者が集まり、多くの商人団体と各地の同郷団体ができ、蘇州府城を中心とした商業ネットワークを形成したことである。徐揚は写実的な手法で、「姑蘇繁華図」に当時の実際に存在した260余りの店舗の看板を描きこんでいる。「姑蘇繁華図」に描かれた人物や船、橋、店舗の多さは、中国絵画史上第一位であるともいえ、当時の蘇州の繁栄ぶりを鮮明に示している。特に胥門の万年橋と閶門の吊橋、山塘街の三つの部分の賑いについて、筆遣いの細かさが極致に達している。

閶門は蘇州で最初にできた八つの城門の一つで、唐代にはすでに繁華街になっていた。明清時期になって、閶門一帯はさらに繁華になり、蘇州の商業交易の中心地と物資の重要な集散地となっていた。画卷に描かれた看板から見ると、ここには布と絹織物

の卸業者が最も多く、両替店や食料問屋、薬局、雑貨店が集中しているほか、貴金属、骨董、漆器、銅または錫製品、祭祀用品、灯籠、建材、飲食などを営む店もある。取引の商品には、地元の製品のほか、山東繭綢、濮院寧綢、川廣薬材、雲貴雑貨、膠州醃猪、南京板鴨、寧波淡鯨、南河醃肉、東北人参、江西瓷器などが並び、各地の製品が揃っている。閶門の前にある吊橋の上を人々がひっきりなしに往来し、橋の下の運河には帆柱が林立する。清代初期、江南地域の綿布交易は蘇州に集中しており、特に閶門の上塘街、下塘街に多くその業者が分布していた。さらに注目に値するのは、この画卷に、数少ない壁広告が描かれており、これらは世界で最初の壁広告の物証ともなっている。

蘇州では、経済が発達し、富裕層が多く、生活水準も高く、美食に気を使い、そのため外食業が盛んであった。「姑蘇繁華図」には、食堂、軽食屋などの飲食店または食料品店も多く描かれており、蘇州で飲食業が特に発達していることを写実的に表現している。明清時代に、蘇州は名医が多いことが知られ、薬局も多かった。その歴史を記録する忠実さが珍しいといえる。

2 画卷の視野

「姑蘇繁華図」は伝統の「長巻」という形の構図を使い、太湖と蘇州城の西にある山々を背景とし、蘇州の西郊にある霊岩山から始め、山下の木洩鎮から東へ進み、横山を過ぎ、石湖を渡り、獅子山と陽山の間を抜けて蘇州城の外堀でもある運河に至り、そして運河に沿い、盤門、胥門から蘇州城へ入り、また閶門から城を出て山塘街を辿り、山塘河に沿っ

て虎丘までの間を描いている。絵には蘇州とその周辺の数十里の優美な景色が延々と連なり、両端は山を描き、中央は蘇州城で占められている。そして豊富で多彩な市民生活と習俗などを鮮明に描いている。

蘇州は古くから中国の有名な水の都であり、都市の繁栄は河川と強くかかわっている。「君到姑蘇見、人家尽枕河。古宮閑地少、水巷小橋多。」「緑浪東西南北水、紅欄三百九十橋。」「处处樓前飄管吹、家家門外泊舟航。」これらの名句は、唐代の詩人たちが水の都の蘇州を描くために詠んだものである。蘇州は中国で最も長い水路と最も多い橋を有する都市である。蘇州の水路は、都市の空間構造及び環境と密接した関係を持ち、2500年余りの歴史の間に、蘇州城と完全に融合し、蘇州という都市の生活の一部となってきた。古くから、蘇州の都市空間を構成する主要要素は水であり、山ではない。徐揚は蘇州出身で、もちろんこれを知っていた。それゆえ、彼が「姑蘇繁華図」を描くときに、運河を脈として際立たせた。大運河は昔から、蘇州の位置の安定と経済の発展に重要な役割を果たし、南北の経済と文化を繋ぐ大動脈として、蘇州の繁栄と発展を大きく促した。「姑蘇繁華図」に描かれた一村（山前村）、一鎮（木澆鎮）は、太湖周辺の町の典型的な景色を表している。

当然であるが、絵には山も見られる。蘇州は山があつて川があり、大自然の靈氣が集まるところなのである。靈巖山と虎丘は古くからの名所であり、康熙帝と乾隆帝がその度重なる江南巡幸で、いずれもこの二つの名山を散策しただけではなく、詩文も残した。徐揚が描いた靈巖山と虎丘は皇帝にこれらの愉快的記憶を思い出させたであろう。これが徐揚が「姑蘇繁華図」を作成する目的の一つである。絵に描かれた人物や景色が繁多であり、人物の動作ないし表情が生き生きと描かれている。これらによって、当時の蘇州の景観と民衆の生活や都市の風貌が具体的に鮮明に表現し、乾隆時代の蘇州における都市と農村の社会生活を忠実に描き出したのである。

絵の万年橋から入った城内にある道前街の木柵欄に位置する江蘇按察使司の官署は、科挙試験の地方

試験である院試の試験会場になっている。江蘇の各府からの初級試験に合格した童生たちが試験場に入っており、門は門番によって厳重に守られ、見物人が門前の街に群がっている。近くの店舗が赤い紙で書いた「三場名筆」や「状元考具」などの縁起のいい札を高く掲げ、売り上げを伸ばそうとしている。明清時代の蘇州は、文化が発達し、優れた人材が多いところであり、科挙試験の成績が特に優秀であった。その理由は、蘇州の経済力にもあるが、それ以上に私塾から県学・府学・書院まで、教育機関が発達し、教育に強い関心を持つ社会的環境に恵まれたことが主な原因であった。「姑蘇繁華図」に多くの授業や勉強、試験の場面が描かれており、この試験場の場面がその代表である。

蘇州城内の学士街に、王衙弄という巷がある。ここには明の大学士の王鏊の故居があり、旧名は「怡老園」といい、清に入って江蘇布政使の官署になった。これは「姑蘇繁華図」に見られる「江蘇総藩」という大きい旗が掲げられているところである。現在の蘇州機械学校に、明代の土台の上に清代の建物が建って残っており、これが江蘇布政使官署の遺構である。明代の怡老園は夏駕湖の近くにあり、川に臨んで構えられ、城壁が水面に映され、景色が絶妙であった。多くの蘇州の文士がこの園林に集まって唱和し、蘇州文化史上もっとも輝くページを綴った。徐揚が「姑蘇繁華図」を描いたときには、怡老園がすでに布政使官署となってはいたが、絵にはまだ庭園の優美さが鮮明に残されている。注目したいのは、徐揚がここで意図的に各府・県から納められた税銀を入庫する場面を描いたことである。蘇州が朝廷にとって賦税の要地である特徴を表すほか、乾隆帝がこの場面を見て大喜びすることを狙っていたのであろう。江蘇布政使官署の正門の柱に、「帝徳如天、臣心似水」という対聯が貼ってあり、これは徐揚の真意を表すもので、この画卷において、点睛の一筆である。

3 画卷の価値

「姑蘇繁華図」を検討する際、これを「清明上河

図」と比較する人が多い。前者は清代の宮廷画家の徐揚の作品で、後者は北宋の張昉の作品である。時代が違い、観念も異なっており、芸術の表現もそれぞれの特徴がある。「清明上河図」は簡素であり、特に街頭の人物を細かく描き、広い場面を表現すると同時に、粗末で散乱するようにならない効果を取めた。「姑蘇繁華図」は画面の細密さと場面の真実さ、そしてすべての事物を絵に納めることを追求し、当時の都市と農村の裕福と繁栄を表現することに力を尽くしている。徐揚が「清明上河図」から「長巻風俗画」という伝統形式を継承し、「散点透視法」を駆使して山水と城郭を描き、いっそう際立った芸術効果を収めた。「姑蘇繁華図」は、「清明上河図」の倍あまりの長さを有し、中国絵画史上人物を最も多く描いた作品である。

ある統計によると、この作品に4000余の人物と、2140余棟のさまざまな建物、400余艘の船と筏、50余本の橋が描かれている。ほかに、300余軒の店舗の看板があり、内容が読み取れるものが260軒を上回っている。これらの看板に示された内容及び絵に見られる店舗の分布、業界規模、商品とその産地などのほとんどが、文献の記録と一致していることがわかる。一つの都市の繁栄を描きだすために、260余軒の店舗の看板を描いたものは、明清時代の同じ種類の作品のなかでこれが唯一である。

「姑蘇繁華図」は写実絵画の貴重な作品である。その筆遣いの細かさは驚くほどで、率直でありながら細心であり、自然でありながら工夫を凝らした文化精神を反映している。蘇州は古くから水産物や米を多く産する豊かな土地であり、精細な作業が、経済と文化の形を作る最も基本的で強い要素として、蘇州の社会と文化に深遠な影響を与えてきた。蘇州一帯の米は精細な品質を持ち、天地の靈気を凝縮し、入念な耕作によってできた精華である。蘇州の人々の精巧さ、敏腕さ（精幹）、洗練さ（精練）、緻密さ（精緻）、賢さ（精明）、誠実さ（精誠）を併せ持った個性と態度ができ、そして蘇州の特産品の精美、飲食の精良、演技の精細にまで影響を及ぼした。蘇州の人々が精細さと優美さを追求し、精巧で緻密な物を好み、そこから蘇州的な風格が生まれた。これ

は、徐揚がその「姑蘇繁華図」に新機軸を打ち出し、独創性を見せた根本の原因である。そして、「姑蘇繁華図」の精確で細緻な記録としての価値は、社会の各階層を描いた所にも見える。明清の絵画作品は多いが、そのほとんどは帝王将相または高官や大商人などの上層階級のことを記録し、都市に住む手工業者または物売りや使い走り、雑役夫などに視線を向けることが甚だしく少なかった。明清の江南の町々は、全国の経済の中心であったばかりでなく、文化の中心でもあった。しかし、これらの町の発展と文化の繁栄に重要な役割を果たした多くの有能な職人たちが、往々にして画家たちに無視されていた。「姑蘇繁華図」が蘇州の都市生活を記録する時に、彼等を極めて多く描き出し、中にはあらゆる階層と職業の人がおり、その多くは普通の市民であった。都市生活を忠実に記録することにおいて非常に貴重な絵画資料としての価値を有している。

絵の着想から見れば、「姑蘇繁華図」の画面構成が蘇州の園林の空間構造に極めて似ている。蘇州で園林を作る時の意図は、まず賑やかな都会から離れ、都会の喧騒の中にいながら、その悪に染まることなく、高い塀に囲まれた有限な空間で、静かで優雅な生活を楽しんだ。明清時代の蘇州の特に発達した文人詩と文人画が、園林の造営に最もいい環境をなした。園林の建造にあたる人のほとんどが、高いレベルの文化を持ち、作詩と絵画に優れ、芸術の奥義を極めたものであった。蘇州の園林は明清時代の中国人にとって理想的で完璧な居住条件と生活環境を代表しており、園林と住宅が一体になり、観賞、遊覧、居住の多くの機能を併せ持っている。このような建築形式ができた理由は、蘇州の人々が自然を慕い、自然と和やかに付き合いたいためで、住居環境を美化して完備させる一種の芸術的な創造なのである。徐揚の「姑蘇繁華図」に多く描かれた民家や邸宅は、蘇州一帯の都市と農村の園林建築を代表する最もいい例である。

徐揚が「姑蘇繁華図」（原題「盛世滋生図」）を描いた目的は、清初以来の「治化昌明、超軼三代、幅員之広、生齒之繁、亘古未有」に感心し、かつ乾隆帝の度重なる江南巡幸と「尤重実録」の審美に影響

されたのである。宮廷画家としての徐揚が乾隆帝の賛賞を得たいと願うのは極めて自然であった。それゆえ、彼がこの絵で蘇州の繁栄と豊かさを極度に誇張し、国家が安定し民が安らかな太平無事の世を表現しようとしたあまり、盛世を謳歌することに行き過ぎた、真実と違う場面を描いたところが見られる。例えば、彼の描いた蘇州市民のほとんどが、官服と官員の帽子を身につけており、平民と官僚の区別は、長着と帽子に官位を示す飾りの有無だけである。清代中期、蘇州に住む退隠した官員が多く、大商人も金を納めれば官職を獲得できたが、絵にあるように街のいたるところに見られるほど多いわけではなかった。これは明らかに太平を誇張し、真実さを失った結果である。そして、明清時代の蘇州には、全国で最も発達した風俗業があり、都市の娯楽がかなり多様であった。唐寅が閶門を謳う詩に、「翠袖三千

楼上下、黄金百万水西東。」という詩句があった。しかし、青楼や妓院については「姑蘇繁華図」にはまったく示されておらず、乾隆年間に、蘇州閶門の妓院がすべて取り締まられたように思われかねない。このような描き方は、乾隆帝を喜ばせることができるが、明らかに虚偽で粉飾であり、歴史文献に对照させれば、真実とまったく違うのである。この二つの問題を挙げたのは、「姑蘇繁華図」があくまでも絵画作品であることを理解するために過ぎない。全体的にみれば、「姑蘇繁華図」が写実的な傑作の名に相応しいものであり、「乾隆の盛代」の蘇州の都市空間を研究するための具体的な資料であると同時に、非常に珍重に値する芸術作品であり重要な文化遺産である。

(訳 彭偉文)

(げん・めい)